

スポーツチャンバラを教材とした 大学体育授業は共感性を向上させるか：

球技科目及び講義科目受講者との比較による 事例研究

川井良介¹，菅野慎太郎²，阿部剣征³

¹日本大学文理学部，²日本大学スポーツ科学部，³別府大学

要旨

本研究は、スポーツチャンバラを教材とした大学体育授業が、受講者の共感性を向上させるという仮説を検証することを目的とした。対象者は、2023年度前学期に日本大学文理学部で開講された健康・スポーツ教育実習（スポーツチャンバラ）を受講した学生（以下「スポチャン群」と略す）と、健康・スポーツ教育実習の球技種目を受講した学生（以下「球技群」と略す）と、健康・スポーツ教育論を受講した学生（以下「講義群」と略す）とした。本研究においては、各群の学生が獲得した成果を検証するために、「多次元共感性尺度10項目短縮版（以下「MES-SF」と略す）」を質問紙として使用した。調査時期は、第1回目と第15回目の授業後とした。そして、回答に不備のなかったスポチャン群の学生38名と、球技群111名、講義群の学生63名を対象者とした。統計分析は、3つの授業群を対象者間要因、2つの時間を対象者内要因とする2要因分散分析を用いた。その結果、MES-SFの他者指向的反応、視点取得という因子が、スポチャン群において授業前よりも授業後で有意に向上した。以上のことから、スポーツチャンバラの授業を受講することで、相手の気持ちを考えることや、相手の視点に立って考えるといった共感性が向上することが示唆された。

キーワード

スポチャン，多次元共感性尺度10項目短縮版，他者指向的反応，視点取得

責任著者：川井良介 Email: kawai.ryousuke@nihon-u.ac.jp

緒言

2022年度における大学・短期大学への進学率は60.4%となり、前年度より1.5ポイント上昇し、過去最高となった（文部科学省，2022）。1990年代以降の日本では、18歳人口数の減少に反比例するように大学入学定員数が増加しているため、現在は「大学全入時代」とも言えるような状況となった（日高，2023）。そのため、20世紀後半では大学進学を希望しなかったような学生層が大学へ多数入学してくることに加え、各大学で学生数確保のために入学を推進している留学生や社会人学生も増加し、大学生は一層多様化することが指摘されている（木原，2023）。

近年は自己肯定感やコミュニケーション能力の低さ、対人緊張を原因とした疲労感や抑うつといった大学生のメンタルヘルスの悪化が問題となっている（桐山，2008；三宅・岡本，2015；及川・坂本，2008；高柳ほか，2017）。加えて、昨今の新型コロナウイルス感染症の拡大

による影響で、対面が主であった大学生活や友人とのコミュニケーション形態に変化が生じたことで、うつ病やうつ状態を呈する大学生が増加（梶谷ほか，2021）するなど、問題は多様かつ複雑となっている。

このような問題を解決するための一方策として、体育実技科目（以下「大学体育」と略す）の活用が挙げられる。大学体育を受講することによって、身体的効果、精神的効果、社会的効果が得られることが報告されている（全国大学体育連合，2010）。具体的には、大学体育の受講によって日常の身体活動量や筋力の向上がみられたことを報告した研究（林・宮本，2009；内田・神林，2006；山津，2014）、社会的スキルやライフスキルといった心理社会的側面について検討を加えた研究（奈良・木内，2021；野口ほか，2013）が挙げられる。また、新型コロナウイルス感染症が拡大した2020年度以降は、難波ほか（2021）や西田ほか（2021）などによって、遠隔形式で開

講された体育授業の教育効果に関する検討もなされている。このように先行研究で検証された知見からも、大学体育の有益性が見て取れる。

筆者らが所属する日本大学文理学部（以下「本学部」と略す）では、体育科目が必修科目に位置づけられている（日本大学文理学部, 2023）。講義科目は「健康・スポーツ教育論」（以下「健スポ論」と略す）、実技科目は「健康・スポーツ教育実習」（以下「健スポ実習」と略す）という名称で設置されている。健スポ実習ではフィットネスやレクリエーションスポーツ、トレーニング、ボールゲーム、アウトドアに類する種目が約50コマ開講されており、年間で約2,000人の受講生の多種多様な希望に応えられるような体制を整えている。この健スポ実習について検討を加えた研究としては、川井ほか（2023）や川井・菅野（2024）、山崎ほか（2022）、深田ほか（2024）の研究が挙げられる。

特に、川井ほか（2023）や川井・菅野（2024）の研究では、スポーツチャンバラ（以下「スポチャン」と略す）を教材とした検討を行っている。このスポチャンとは、田邊哲人によって1971年に日本で創始されたニュースポーツの1種目で、大多数の大人が幼少期に遊戯として経験するような「チャンバラごっこ^{注1}」と「小太刀護身道^{注2}」を掛け合わせてスポーツとして昇華した種目である（田邊, 2002）。このようにスポチャンは道具を介して相手を打ったり、相手に打たれたりする種目であり、単に相手を打つだけではなく、相手の動きを読んで攻撃をかわしたり、隙をついたりするなどの対人的な駆け引きに競技上の魅力があると考えられる。それに加えて、合戦や乱戦という団体戦をすることができるという特徴も有している。筆者らが健スポ実習の教材としてスポチャンを導入した背景には、前述したようなスポチャンの競技内で行われる様々な駆け引きを通して、受講者の共感性を高めることができると考えたためである。

ここで触れられている共感性とは、たとえ親しくない相手であっても具体的なスキルを適切に発揮するために必要な概念とされている（鈴木・木野, 2015）。また、木野・鈴木（2016）によれば、共感性は他者理解を深め、円滑な対人関係の基礎となるものとされている。さらに、井芹（2016）は異質な集団における多様性を理解する姿勢や、自律的・相互作用的な学びにつながる能力の1つとして、共感性が重要な位置を占めていることを指摘している。この共感性に着目し、スポチャンを教材とした授業が受講者の共感性にどのような変化が生じるかを検討した川井ほか（2023）では、受講前と比較して授業後で共感性の中でも他者指向的の反応と視点取得という相手の視点に立って考えるという因子が向上したことを報告

している。また、川井・菅野（2024）ではスポチャンを教材とした授業とフィットネストレーニングを教材とした授業の受講者を対象に、共感性の変化について比較・検討を行っている。その結果、受講する運動種目に関係なく、共感性の中でも他者の感情や意見に影響されやすいことを示す被影響性という因子が向上したと述べている。しかしながら、これらの先行研究ではスポチャンを教材とした授業を受講した学生の心理的な変化について比較・検討を行っているものの、当該授業の受講者と非受講者の比較、当該授業の受講者と大学体育で実践されている球技種目の受講者との比較ができておらず、健スポ実習や教材としてのスポチャンの有用性については検討の余地があると言えよう。

以上のことから、筆者らはこれまでの研究成果（川井ほか, 2023；川井・菅野, 2024）を踏まえ、スポチャンを教材とした大学体育を受講した学生は、球技種目を教材とした大学体育を受講した学生や大学体育における実技種目を受講していない学生と比較して、共感性が向上するという仮説を立てた。本研究では、上述の仮説を検証することを目的に、スポチャンを教材とした大学体育の受講有無によって受講者の共感性にどのような変化が生じるかを比較・検討することとした。また、共感性の観点から大学体育において最も広く行われている球技とスポチャンを比較することで、教材としてのスポチャンの有用性についても検討する。

方法

本研究では、スポチャンを教材とした大学体育の受講によって、受講者の受講前後で共感性が向上するかを検討するため、混合計画（授業・時間）の2要因分散分析を実施する。

1. 対象者および調査時期

対象者は、2023年度前学期（1回/90分の授業を15回）に本学部で開講された実技科目である健康・スポーツ教育実習（スポーツチャンバラ）（以下「スポチャン授業」と略す）を受講した学生のうち、質問紙の回答に不備がなく、対面形式で授業に参加した38名（年齢：19.0 ± 1.1歳、男性：25名、女性：13名）をスポチャン群とした。また、対照群として、同学期に開講された実技科目である健康・スポーツ教育実習の球技種目を受講した学生のうち、質問紙の回答に不備がなく、対面形式で授業に参加した111名（年齢：18.6 ± 1.2歳、男性：69名、女性：39名、未回答：3名）を球技群とした。講義科目である健康・スポーツ教育論を受講した学生のうち、前学期中に実技授業を受講していない者を対象とし、質問紙の回

答に不備がなく、授業に参加した63名（年齢：18.5 ± 0.8歳，男性：37名，女性：25名，未回答：1名）を講義群とした。対象者には、各授業の第1回目で本研究の目的や内容に関する説明を口頭で行い、同意が得られた者のみ対象とした。なお、本研究で対象としたスポチャンと類似の種目である武道種目や球技種目の運動部活動に加えて、そのようなサークルに所属している学生は各群の対象者から除外した^{注3}。

調査時期は2023年4～7月であった。本研究では、各授業の受講者の共感性の変化を縦断的に比較・検討するために、授業の第1回目と第15回目の2時点で調査を実施し、第1回目で収集した回答を「pre」、第15回目で収集した回答を「post」とした。なお、本研究は日本大学文理学部研究倫理審査委員会の承認の下に実施した（承認番号：05-02）。

2. 授業概要

表1にスポーツチャンバラの授業概要を示した。本研究の対象となる授業科目「健康・スポーツ教育実習」は、本学部において、大学初年度学生を対象として開講される基礎教育科目の1つであった。日本大学文理学部（2023）は当該授業の目的について「スポーツや身体運動の実践を通して、体力・運動技能の向上を目指すだけでなく、身体感覚や身体知を獲得するとともに、自己表

現能力やコミュニケーション能力を養うことを目的とする。また、自らの生活習慣に応じたスポーツライフの形成ができるようにすることを目的とする。」としている。本研究で対象としたスポチャン授業は、上記の目的を達成するために、①経験や学習から得られた豊かな知識と教養に基づいて運動に取り組んだり、倫理的な課題を理解したり、説明することができる、②新しいことに挑戦する気持ちを持つことができる、③親しい人々とのコミュニケーションを通じて相互に意思を伝達することができる、④集団の活動において、より成果を上げるために、お互いを尊重することができる、の4つの目標を設定し、授業を実施した。なお、本授業の担当者は公益社団法人日本スポーツチャンバラ協会公認A級インストラクターの資格を取得しており、大学体育での指導経験を5年以上有する者であった。これらの目的や目標、授業担当者によって授業が実施された。

3. 学修過程

表2にスポーツチャンバラの授業計画と実際の授業内容を示した。第1回目は、授業の概要を説明するガイダンス及び施設紹介を行い、第2回目は、Zoomを利用して数種類のアイスブレイクを行い、第3回目から実技を開始した。第3回目は、怪我予防のためのストレッチ並びにスポーツチャンバラの基本動作を説明し、セル

表1 健康・スポーツ教育実習（スポーツチャンバラ）の授業概要

授業の位置付け	<ul style="list-style-type: none"> ◆日本大学文理学部の卒業に関わる必修科目の中でも基礎教育科目（健康・スポーツ教育科目：健康・スポーツ教育論、健康・スポーツ教育実習）に設定されている。 ◆健康・スポーツ教育実習は、スポーツや身体運動の実践を通して、体力・運動技能の向上を目指すだけでなく、身体感覚や身体知を獲得するとともに、自己表現能力やコミュニケーション能力を養うことを目的としている。また、自らの生活習慣に応じたスポーツライフの形成ができるようにすることを目的に設定されている。 ◆前・後学期で約50科目の種目が開講されており、学部内の様々な学科に所属する学生が各個人の受講したい種目を選択し、受講するように設定されている。
授業のねらい	<ul style="list-style-type: none"> ◆スポーツチャンバラを中心とした様々な身体活動を通じて、体力や健康の獲得、課題発見・解決能力、挑戦力、コミュニケーション力、リーダーシップ、協働力を養成する。 ◆スポーツを楽しむ態度を身につけ、体力や健康に関する理解を深め主体的に健康行動を実践し、健康な生活習慣を身につけることができる。
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ◆目標①：経験や学習から得られた豊かな知識と教養に基づいて運動に取り組んだり、倫理的な課題を理解したり、説明することができる。 → 主に、評価方法の「できる、わかる」に対応 ◆目標②：新しいことに挑戦する気持ちを持つことができる。 → 主に、評価方法の「できる」に対応 ◆目標③：親しい人々とのコミュニケーションを通じて相互に意思を伝達することができる。 → 主に、評価方法の「かかわる」に対応 ◆目標④：集団の活動において、より成果を上げるために、お互いを尊重することができる。 → 主に、評価方法の「かかわる」に対応
目標に対応した評価方法	<ul style="list-style-type: none"> ◆できる（運動技能領域） 試合（個人戦、団体戦、乱戦、合戦）：授業中の様々な身体活動を通じて得た経験や学習によって得た知識や教養に基づいて、有効打を獲得できていたか。 実技テスト：スポーツチャンバラの形における基本の動作を忠実に実践できていたか。 ◆わかる（認知領域）レポート課題等に対して適切な回答ができており、かつ自分の意見が反映されているか。 スポーツチャンバラのルールや審判法について正しい知識や教養を身につけているか。 ◆かかわる（情意領域・社会行動領域） 活動を実施する集団内でコミュニケーションを取り合いながら、様々な課題に協働して取り組んでいたか。 活動を実施する集団内で授業内の新たな学びや気付きを共有し合ったり、課題を発見したり、問題を解決できていたか。

表2 健康・スポーツ教育実習（スポーツチャンバラ）の授業計画と実際の授業内容

回	授業計画	実際の授業内容（到達目標との対応関係）
1	ガイダンス ※ pre アンケート実施	・授業の進め方や成績評価に関する説明。 ・スポーツチャンバラに関する説明。（目標①）
2	アイズブレイク・スポーツチャンバラ を見てみよう ※遠隔授業 (欠席者用にレコーディング)	・Zoomを用いた同時双方向型で実施。 ・グループに分かれて、数種のアクティビティを用いたアイズブレイクを実施。（目標③）
3	スポーツチャンバラの基本動作とストレッチ	・ペアに分かれて、動的・静的ストレッチングを実施。 ・スポーツチャンバラの基本動作の説明、打ち方と受け方を実践。セルフジャッジで1対1の試合を実施。（目標①②）
4	スポーツチャンバラの試合：個人戦	・ペアに分かれて、スポーツチャンバラの打ち方と受け方を実践。 ・1対1の個人戦（リーグ戦形式）を実施（1人5～6試合程度実施）。個人戦は一本勝負形式と三本勝負形式で実施。（目標④）
5	スポーツチャンバラの戦術① ※遠隔授業 (欠席者用にレコーディング)	・Zoomを用いた同時双方向型で実施。 ・グループに分かれて、前回の試合動画を視聴し、感想や改善点を共有し合う。「相打ちの戒め」について説明。（目標③）
6	体力および生活習慣チェック	・各自、生活習慣をチェックシートを用いて確認。 ・ペアに分かれて、体力テストを実施。結果について、感想や改善点を共有し合う。（目標①③）
7	体力テスト/スポーツチャンバラの形 を学ぶ	・ペアに分かれて、体力テストを実施。結果について、感想や改善点を共有し合う。 ・体力テストが終了したペアから、スポーツチャンバラの形（かた）の練習。（目標①②③）
8	スポーツチャンバラに必要な体力と審 判法	・下半身の筋力向上に焦点を当てたトレーニングを実施。 ・スポーツチャンバラの審判の説明、旗の表示と各宣告方法を確認。打突可能な部位を上半身や下半身に限定した状態で試合を実施。（目標①②）
9	スポーツチャンバラの戦術② ※遠隔授業 (欠席者用にレコーディング)	・Zoomを用いた同時双方向型で実施。 ・グループに分かれて、前回の試合動画を視聴し、感想や改善点を共有し合う。「相打ちの戒め」について説明。（目標①③）
10	スポーツチャンバラの形を披露する	・グループに分かれて、スポーツチャンバラの形を練習。 ・グループ内でスポーツチャンバラの形を披露し、感想や改善点を共有し合う。（目標①③）
11	スポーツチャンバラの試合：団体戦①	・グループに分かれて、グループごとにウォーミングアップを実施。 ・1対1の個人戦を繰り返す団体戦（リーグ戦）を数回（1人3～5試合程度）実施。勝数に応じて使用する剣の長さを変更して実施。（目標③④）
12	スポーツチャンバラの試合：団体戦②	・グループに分かれて、グループごとにウォーミングアップを実施。 ・1対1の個人戦を繰り返す団体戦（リーグ戦）を数回（1人3～5試合程度）実施。勝数に応じて使用する剣の長さを変更して実施。（目標③④）
13	スポーツチャンバラの試合：乱戦と合 戦①	・グループに分かれて、グループごとにウォーミングアップを実施。 ・乱戦、合戦を数回（1人3～5試合程度）実施。受講者全員が頭上に紙風船を装着し、全員で一斉に戦う乱戦を実施。（目標③④）
14	スポーツチャンバラの試合：乱戦と合 戦②	・グループに分かれて、グループごとにウォーミングアップを実施。 ・乱戦、合戦を数回（1人3～5試合程度）実施。受講者全員が頭上に紙風船を装着し、2～5グループが一斉に戦う合戦を実施。（目標③④）
15	審判法のテストと授業の振り返り ※遠隔授業 ※ post アンケート実施	・オンライン学習支援システムを通じたオンデマンド型。 ・Webテストの実施。授業全体やWebテストの内容の振り返り。（目標①②）

※本表は学部要覧やシラバスの内容を参考に作成した。

フジャッジによる1対1の試合を行った。第4回目は、前回の授業と同様の試合方法でリーグ戦を実施し、試合の様子を固定画角のカメラで撮影をした。第5回目は、前回の授業で実施した試合の様子を視聴し、同じリーグで試合を実施したメンバーでグループを構成し、感想や今後の改善点を共有し合った。第5回目までの授業では、体育・スポーツの授業を受講することへの緊張感を解くとともに、スポーツチャンバラ特有の相手を打ったり受けたりする状況へ慣れることを主な目的として授業を進めた。第6回目は、ペアや3人グループに分かれて、新体力テストを実施した。第7回目は、前回の授業で実施した新体力テストの結果や感想、今後の改善点を4人程度のグループで共有し合った後、スポーツチャンバラの形（かた）の練習を実施した。第8回目は、スポーツチャンバラに求められる下半身の筋力の向上につながるトレー

ニングを説明し、実施した。また、スポーツチャンバラの審判方法についても説明した後、打突可能な部位を上半身や下半身に限定した状態でリーグ戦を実施し、試合の様子を固定画角のカメラで撮影をした。第9回目は、前回の授業で実施した試合の様子を視聴し、同じリーグで試合を実施したメンバーでグループを構成し、自身が試合者の立場や、審判の立場から感想や今後の改善点を共有し合った。第10回目は、4～5人程度のグループに分かれ、第7回目の授業で取り扱ったスポーツチャンバラの形をグループ内で披露し、感想や改善点を共有し合った。その際、各グループにおいて、スマートフォンを用いて、スポーツチャンバラの形を撮影し、撮影した動画は後日、授業実施者に提出させた。第11回目と第12回目は、4～6人程度のグループに分かれてウォーミングアップや試合練習を実施した後、3～5試合程度の団体戦を

行った。なお、グループの勝敗に応じて、団体戦で使用する剣の長さを変更して実施した。第13回目は、新たに4～6人程度のグループに分け、受講者は自身が着用している面の頭頂部に紙風船を装着し、乱戦や合戦を実施した。第14回目は、前回の授業よりも一度に戦うグループを増やしたり、試合場の大きさを変更したりする形で乱戦や合戦を実施した。第15回目は、スポーツチャンバラのルールや審判法に関するWebテストを実施した後、Webテスト並びに本授業全体の振り返りを実施した。

4. 調査内容

本研究では、受講者の共感性を評価するため、木野・鈴木 (2016) が作成した「多次元共感性尺度10項目短縮版 (short form of the Multi-dimensional Empathy Scale : 以下「MES-SF」と略す)」を用いた。MES-SFは、「被影響性 (他者の感情や意見に影響されやすいことを示す)」、「他者指向的反応 (他者に焦点づけられた情緒反応を示す)」、「想像性 (自己を架空の人物に投影させる認知傾向を示す)」、「視点取得 (相手の立場からその他者を理解しようとする傾向を示す)」、「自己指向的反応 (自己に焦点づけられた情緒反応を示す)」の5因子10項目で構成された尺度である。MES-SFは、MESと同様に、共感性の情動的所産と認知的過程の生起に関わる個人傾向を測定するものであり、認知・情動の次元に加え、他者指向性-自己指向性という指向性の弁別に焦点を当てている点に特徴がある (木野・鈴木, 2016)。また、MES-SFは、木野・鈴木 (2016) によって信頼性と妥当性が確保されている。

MES-SFの全ての回答は「全く当てはまらない (1点)」、「たいてい当てはまらない (2点)」、「どちらとも

いえない (3点)」、「たいてい当てはまる (4点)」、「とても当てはまる (5点)」の5件法で求めた。逆転項目については、6から回答された点数を引いた数値を算出し、点数化した。そして、各因子を構成する項目の合計を下位尺度得点とした。

5. データ分析および統計処理

MES-SFは各下位尺度得点の平均点と標準偏差を算出した。そして、質問紙を回答した時点 (pre・post) を対象者内要因、実施授業群 (スポチャン群・球技群・講義群) を対象者間要因とする混合計画の2要因分散分析を行った。分散分析において有意な交互作用が認められた場合には、Bonferroni法による単純主効果検定を行った。有意な主効果が認められた場合には、下位検定としてBonferroni法による多重比較検定を行った。また、群間の差の大きさを評価するために効果量を算出した。効果量の目安としてCohen (1988) や水本・竹内 (2011) を参考に、主効果と交互作用については $\eta^2 = .01$ を効果量小、 $\eta^2 = .06$ を効果量中、 $\eta^2 = .14$ を効果量大とした。多重比較検定については、対象者内要因の場合はGlass's Δ を用いて $\Delta = .20$ を効果量小、 $\Delta = .50$ を効果量中、 $\Delta = .80$ を効果量大、対象者間要因の場合はCohen's d を用いて $d = .20$ を効果量小、 $d = .50$ を効果量中、 $d = .80$ を効果量大とした。なお、統計処理はSPSS ver. 29.0 (SPSS Inc. Chicago, IL) で実施し、有意水準は5%未満とした。

結果

表3に、MES-SFの各下位尺度得点の平均値と標準偏差の推移と2要因分散分析の結果を示した。その結果、まず、被影響性、他者指向的反応、視点取得、自己指向

表3 MES-SFの2要因分散分析結果

	スポチャン群 (n=38)		球技群 (n=111)		講義群 (n=63)		F 値			多重比較検定
	pre	post	pre	post	pre	post	時間	授業	交互作用	
被影響性	5.45 (1.27)	5.21 (1.66)	5.31 (1.17)	5.51 (1.17)	5.59 (1.07)	5.27 (1.21)	1.36	0.19	3.79* ($\eta^2 = .01$)	n.s.
他者指向的反応	6.50 (2.86)	7.82 (2.34)	7.85 (1.34)	7.81 (1.39)	8.00 (1.16)	7.86 (1.28)	8.51** ($\eta^2 = .01$)	4.24* ($\eta^2 = .03$)	12.36*** ($\eta^2 = .03$)	pre : スポチャン < 講義 (d=.76)*** pre : スポチャン < 球技 (d=.70)*** スポチャン : pre < post ($\Delta = .46$)***
想像性	5.87 (1.21)	6.29 (1.52)	6.02 (1.26)	6.05 (1.21)	6.10 (1.28)	5.94 (1.16)	0.94	0.43	2.31	n.s.
視点取得	6.53 (2.38)	7.97 (1.53)	7.33 (1.40)	7.38 (1.50)	7.41 (1.15)	7.16 (1.47)	11.77*** ($\eta^2 = .02$)	0.12	14.68*** ($\eta^2 = .04$)	pre : スポチャン < 球技 (d=.47)* pre : スポチャン < 講義 (d=.51)* post : 講義 < スポチャン (d=.54)* スポチャン : pre < post ($\Delta = .61$)***
自己指向的反応	6.08 (2.12)	5.68 (2.43)	6.10 (1.59)	5.99 (1.71)	5.67 (1.80)	6.48 (1.64)	0.42	0.23	5.25** ($\eta^2 = .02$)	講義 : pre < post ($\Delta = .45$)**
上段 : 平均値 (下段) : 標準偏差							* : p < .05 ** : p < .01 *** : p < .001 n.s. : Not Significant η^2 , d, Δ : 効果量			

的反応に有意な交互作用が認められた(被影響性: $F(2, 209) = 3.79, p < .05, \eta^2 = .01$; 他者指向的反応: $F(2, 209) = 10.25, p < .001, \eta^2 = .03$; 視点取得: $F(2, 209) = 14.68, p < .001, \eta^2 = .04$; 自己指向的反応: $F(2, 209) = 5.249, p < .01, \eta^2 = .02$). そのため、水準ごとの単純主効果検定をした結果、まず、他者指向的反応、視点取得で共通して、スポチャン群にのみ時間による単純主効果と、preにのみ授業による単純主効果が認められた。多重比較検定の結果、いずれもスポチャン群がpreよりもpostで有意に高い値を示し(他者指向的反応: $p < .001, \Delta = .46$; 視点取得: $p < .001, \Delta = .61$), preにおいてはいずれもスポチャン群より球技群と講義群が有意に高い値を示した(他者指向的反応: $p < .001, d = .76$; 視点取得: $p < .05, d = .51$). また、視点取得では、postにおいて授業による単純主効果が認められた。多重比較検定の結果、スポチャン群が講義群よりも有意に高い値を示した($p < .01, d = .54$). 次に、自己指向的反応では、講義群にのみ時間による単純主効果が認められた。そして、多重比較検定の結果、preよりもpostで有意に高い値を示した($p < .01, \Delta = .45$). 被影響性については、交互作用が認められたものの、単純主効果は認められなかった。

考 察

本研究の結果から、スポチャン群の「他者指向的反応」と「視点取得」は授業前よりも授業後に有意に向上していた。また、授業後のスポチャン群の「視点取得」は講義群と比較して有意に高い値を示していた。この結果は、川井ほか(2023)の結果を支持するものであった。続いて、スポチャン群において授業後に有意な向上が認められた下位尺度について、個別に焦点を当てていく。

1. 他者指向的反応の変化について

「他者指向的反応」の得点は、スポチャン群のみ授業前と比較して授業後で有意に向上していた。他者指向的反応は、他者に焦点づけられた情緒反応を示す因子で、共感性の中心的な下位概念である(木野・鈴木, 2016)。川井ほか(2023)の研究において、他者指向的反応が向上した背景には、打具を用いて「相手を打つこと」や「相手に打たれること」というスポチャンの競技特性によって、受講者の相手への配慮が喚起されたためと推察されている。また、スポチャンと類似した身体運動を有する剣道を対象とした元嶋・坂入(2019)の研究においても同様に、竹刀を介して相手を直接打突したり、互いに痛みを共有するという剣道の競技特性が、受講者の他者理解を深めることに寄与することが示唆されている。さら

に、武道種目に関連した研究として柔道授業を対象にした島ほか(2020)の研究によると、柔道を教材とした大学体育に取り組むことで、共感性が高まることが報告されている。柔道においては、取(投げ側の人)と受(投げられる側の人)の2人で実施するその競技特性から、他者理解を深めることができると考えられており(島ほか, 2020)、山本ほか(2013)によれば、柔道授業を通じて、柔道授業場面において「相手の気持ちに気づく」ことができるようになることと示唆されている。つまり、スポチャンや武道種目のような対人競技に取り組む中で経験をjする、相手を打ったり、相手に打たれたり、相手を投げたり、相手に投げられたりするという非日常的な経験は、受講者の他者指向的反応を変化させる可能性がある。

加えて、スポチャンや武道種目のような対人競技では、勝負を仕掛けるタイミングを探る駆け引きが常に行われている(川部ほか, 2021)。その上、剣道では、相手との駆け引きや精神状態がパフォーマンスに大きく影響するため、あらゆる状況を予め察知することや、相手の心理、動作に対する素早い予測が要求される。この八木沢ほか(1996)の指摘は、スポチャンにも共通すると考えられる。例えば、攻防の中で相手の気配や動きを事前に察知し、適切な対応をしたり、相手の動きを誘ったり、相手の動きに応じて技を繰り出すことはスポチャンにおいても行われる。そのため、このような競技特性を持つスポチャンに取り組むことで、「相手の気持ち」を考えながら駆け引きをする場面が増え、この因子得点が向上したと推察する。

したがって、スポチャン群はスポチャンの中で行われる打突や駆け引きの経験を通じて、相手の気持ちに気づいたり、相手の気持ちを考えたりすることで、他者指向的反応が向上したと考える。ただし、スポチャン群は授業前において球技群・講義群よりも有意に高い値が認められているため、スポチャン群においては授業前から授業後への向上が認められやすかったという可能性も考えられる。

2. 視点取得の変化について

「視点取得」の得点は、スポチャン群のみ授業前と比較して授業後で有意に向上しており、また、授業後においてスポチャン群は講義群と比較して有意に高い値を示した。視点取得は、相手の立場からその他者を理解しようとする傾向を表す。スポチャンや剣道、柔道のような対人競技においては、相手の立場に立って考えたり、予想を立てたりする能力が要求されるため、このような対人競技に取り組むことで視点取得は向上することが明らか

となっている(川井ほか, 2023; 島ほか, 2020)。陸上競技や競泳のような測定種目においては、自身の動作に集中し、自身の最高のパフォーマンスを発揮することが競技成績に大きく影響するが、スポチャンのような判定種目においては、自身の最高のパフォーマンスを発揮するよりも相手との駆け引きに集中し、その駆け引きの中で即座に状況を認識し、適切な反応をすることが求められる。特に、スポチャンの競技特性上、剣道と同様に2~3mの至近距離で相手と対峙し、自身の身体動作や剣の動きによる複雑な攻防における駆け引きの中から有効打突の獲得を目指さなければならないため(川井ほか, 2015)、より視点取得のような考え方が重要となる。

また、スポチャンのように道具を介した攻防は、自身の動作が相手の動作の発端になったり、逆に相手の動作が自身の動作のきっかけになったりするという関係性が築かれる。このように相対した2人の間で繰り返される攻防において、Kijima et al. (2012)は安定な位相パターンがあることを明らかにしている。そのパターンとしては、相手の動作に対応して相手と逆の動作をしながら、対峙した2人がお互いに攻撃されない間合を維持するというものである。スポチャンや武道種目の攻防においてはこのような関係性が築かれるため、自身の「有効打突を獲得したい」という自身から相手に向かった一方的な考え方では、有効打突を獲得することは難しく、相手からの反撃を受けやすくなってしまふ。したがって、スポチャンでは、常に相手の立場に立った視点や考え方を持つことが重要であり、スポチャン授業に取り組む中で、このような考え方を反復して行ったことがスポチャン授業受講者の視点取得の向上に寄与したと考えられる。

ただし、こういった駆け引きや対人への意識は、今回対照群として設定した球技種目でも多く行われているため、球技群においても向上する可能性がある。しかしながら、本研究ではスポチャン群と講義群の間にのみ有意差が認められた。このような結果となった要因として、スポチャン群において、授業を進める中で提示した様々な課題や動作に制約を付したことが影響したと考える。加納・山本(2020)によれば、共感性を育成する際には、体育授業内において課題を制約することが有効であることが指摘されている。本授業における最も大きな制約は、相打ちをすることはいけないという「相打ちの戒め」である。スポチャンでは、小太刀護身道の「打っても打たれない、勝たなくても負けない」という考え方を尊重しており(田邊, 1989)、自身が有効打突となり得る打突をしたとしても、それと同時に相手から打突をされてしまう攻撃の仕方が戒められているのである。スポチャンの競技において相打ちをしないようにするためには、自身が「相手を

どのようにして打つか」という考えを持ちながら、「相手がどのように打ってくるのか」という視点も求められる。また、スポチャンは身体全身が有効な打突部位となっており、一撃で勝敗が決しやすいため、お互いが「相手を打つ」という考えよりも「相手に打たれないようにする」という考えを持って競技に取り組むことが望ましい。さらに、ボクシングや剣道などの対人競技では、相手と至近距離で身体が接触した状態(ボクシングのクリンチや剣道の鏝競り合い)が発生する。しかしながら、スポチャンは全身が有効打突部位であることから、身体接触しながらも有効打突を与えることができるため、できるだけ身体接触が発生しないような動きを考える必要がある。すなわち、スポチャンの競技中は相手に打たれないようにすることに加えて、相手との身体的な接触も避けなければならないため、より相手の視点に立って駆け引きをすることが重要となる。本授業では、第5回目の授業において「相打ちの戒め」についての説明を行い、その後は授業全体を通じて競技中に「相打ち」が認められた場合には、軽微なペナルティとしてお互いにスコアが入るように設定し取り組ませた。このように授業内で「相打ちの戒め」という制約を教示し、多くの駆け引きを発生させていた。これに加えて、授業内では打突可能な範囲を上半身や下半身に制限したり、男女で使用する道具の長さや本数を変えたり、試合場の大きさを変更したり、様々な課題や制限を付しながら授業を展開した。このような取り組みによって、受講者は自身の考えのみでなく、他者からの目線や考え方を意識しながら授業に取り組むことが、スポチャン授業受講者の視点取得の変化に影響したと考えられる。もっとも、「他者指向的反応」と同様に、スポチャン群は授業前において球技群・講義群よりも有意に高い値が認められているため、スポチャン群においては授業前から授業後への向上が認められやすかったという可能性も考えられる。

3. 自己指向的反応の変化について

「自己指向的反応」の得点について、スポチャン群には有意な変化が認められなかった。自己指向的反応は、観察する他者の心情には対応するが、必ずしも同じ感情や反応を抱かない応答的所産に分類され、他者の不安感に対して憐れみや怒りを感じるといった他者の心理状態について自己に焦点づけられた情緒反応を表す(鈴木・木野, 2008)。澤田(1995)によれば、青年期後期は性格特性としての不安や自我防衛の機制が高まりやすい時期で、それらの機制は苦境にある他者を想像したときの情動反応として見出される「個人的苦しみ」や「無関心ないし冷淡」といった、自己指向的な反応と関連するとされて

いる(澤田ほか, 1992)。したがって、本研究で対象とした大学生は自己指向的反応が生じやすい時期ではあるものの、スポチャン群ではそのような反応が抑制されていた可能性がある。その要因としては、スポチャンの攻防を自身の身をもって経験したことや審判員、応援者という第三者的な立場から観察したことによる影響が考えられる。スポチャンは自身の攻めや打突といった攻撃によって、相手に対して痛みのような個人的な苦しみを与える場面もありつつ、逆に相手から攻撃されることによって、自身が与えた痛みを感じる場面がある。また、Singer et al. (2004)によれば、上述のような相手が自身と同じ痛みや苦痛を感じる場面を観察した際に、他者の痛みを理解したり、不快反応が生じたりすることが示唆されている。つまり、授業を重ねる中で、先述したような相手に対する痛みや苦しみを感じるという場面を数多くの攻防を繰り返して経験したことによって、受講者の自己指向的反応が抑制されたと推測する。加えて、島ほか(2021)によると、巧緻性や投動作を高める運動・スポーツは自己指向的反応を抑制させる可能性が指摘されている。本研究の結果においても、道具の使用による巧緻性が求められるスポチャン群や、ボールによる投動作の獲得が求められる球技群は自己指向的反応に有意な変化が認められていない。一方で、講義群においては自己指向的反応が授業前よりも授業後で有意に向上していた。つまり、講義群は上述のような巧緻性や投動作を高める運動に取り組む機会がほとんど無かったことで、自己指向的反応が抑制されずに得点が有意に向上したと考える。

このように、本研究では大学におけるスポチャン授業および球技授業の受講が受講者の自己指向的反応を抑制していると示唆された。しかしながら、先行研究(川井・菅野, 2024)では、エクササイズ授業においても自己指向的反応に有意差が認められていない。そのため、スポチャン授業や球技種目だけでなく、大学体育の受講が受講者の自己指向的反応を抑制している可能性も考えられる。

4. 本研究の課題

最後に今後の検討課題について触れておきたい。野口ほか(2013)も指摘するように、心理社会的な尺度を検討する際には、統制した計画に基づく実践研究としての実施は困難な部分も多く、特に対象者の統制をとることが困難である。例えば、Boele et al. (2019)によれば、対象者には家庭環境や友人関係、教育環境もそれらの変化に関与することが指摘されていたり、他の授業や課外活動の貢献度を切り分けたり、別途検討を要する交絡因子(アルバイトなど)の影響を考慮(山津, 2023)することが難しい。本研究においても、preにおいてスポチャン

群の「他者指向的反応」や「視点取得」の値が対照群よりも有意に低かったことから、上記の要因が影響していることも大いに考えられる。そのため、今後このようなテーマで研究活動を実施する際には、大学体育受講群と非受講群に分けて比較する伝統的なデザインによらない研究手法が必要になると思われる(山津, 2023)、この点については今後の大きな検討課題の1つであると言えよう。しかしながら、以上のような検討課題を残すものの、今後、より一層大学における教育の質保証に向けた議論がなされることを鑑みると、本研究のような実践研究による知見を蓄積していくことが改めて重要になるのではないだろうか。そして、本研究で教材として取り扱ったスポチャンについては、まだまだ研究成果が少ない現状にあるため、継続して研究活動を行い、教材としての有用性を検討することで、学校体育での活用事例の増加、日本発祥のスポーツであるスポチャンの普及・発展に貢献できると考える。

結 論

本研究は、スポチャンを教材とした大学体育を受講した学生は、球技種目を教材とした大学体育を受講した学生や大学体育における実技種目を受講していない学生と比較して、共感性が向上するという仮説を検証することを目的に実施した。その結果、スポチャンを教材とした実技科目の受講者の共感性(他者指向的反応、視点取得)は、授業前と比較して授業後で有意に向上した。また、授業後における共感性(視点取得)については、講義科目の受講者の授業後と比較して、有意に高い値を示していた。一方、スポチャンと球技種目との間には有意な差を認めることができなかった。したがって、共感性の観点から、スポーツチャンバラという教材は実技科目を受講していない場合に比べて、「他者の気持ちを考える」ことや「他者の視点に立って考える」といった共感性を向上させることが示唆された。そして、大学体育において最も広く行われている球技種目と比較して、スポーツチャンバラを実施しても学習成果に大きな差がないことから、スポーツチャンバラを教材として活用することは、大学体育に対する期待に十分に込められることができると考える。

注

注1) 幼少期に公園や野山等で木の棒や新聞紙を丸めて作った剣などを振り回す遊びを指す。

注2) 田邊哲人によって創始された身の回りにある短いものを無理なく、無駄なく、巧みに使って護身と心身の鍛錬を目的とした護身術の1種を指す(田邊, 1989)。非力な女性や少年少女が腕力を鍛えるというよりも、持ったものをいかに巧みに使って護身をするかを学ぶ運動文化である。太刀

を使用する場合には、全長60cm程度の小太刀を使用する。
注3)本研究では運動の実施が結果に影響を及ぼす可能性があったため、スポチャン群については剣道や柔道といった武道種目の運動部活動に所属している学生を対象者から除外した。球技群については球技種目の運動部活動に所属している学生を対象者から除外した。講義群については上述のいずれかの運動部活動に所属している学生を対象者から除外した。

付 記

本研究は令和5年度(公社)全国大学体育連合大学体育研究助成により実施されたものです。

謝 辞

研究にご協力をいただいた各授業の受講者の皆様に心より感謝申し上げます。また、多くのご指摘をいただいた査読者の皆様にも感謝申し上げます。

文 献

- Boele, S., Van. Der. Graaff, J., de. Wied, M., Van. der. Valk, IE., Crocetti, E., and Branje, S. (2019) Linking parent-child and peer relationship quality to empathy in adolescence: A multilevel meta-analysis. *J. Youth Adolesc*, 48(6) : 1033-1055.
- Cohen, J. (1988) *Statistical power analysis for the behavioral sciences* (2nd ed.). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- 深田喜八郎・小山貴之・大嶽真人・鈴木理・高橋正則・長澤純一・松本恵・水上博司・吉田明子・川井良介・山崎紀春・菅野慎太郎 (2024) 運動経験、性別、学問系統が大学1年生の社会情緒的コンピテンスに与える影響—文理学部における健康・スポーツ教育科目の受講生を対象として—。日本大学FD研究, 11 : 49-60.
- 林直亨・宮本忠吉 (2009) 週1回の大学授業における筋力トレーニングが筋力に与える影響。体育学研究, 54 : 137-143.
- 日高義博 (2023) 少子化時代に向けて大学教育はどうあるべきか。専修大学史紀要, 15 : 31-51.
- 井芹まい (2016) 大学生の共感性研究の動向。早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊, 24 : 99-107.
- 梶谷康介・土本利架子・佐藤武 (2021) 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) パンデミックが大学生のメンタルヘルスに及ぼす影響：文献および臨床経験からの考察。健康科学, 43 : 1-13.
- 加納岳拓・山本裕二 (2020) 他者への共感の育成に向けた体育授業の可能性—小学校1年生の教室授業と体育授業における行動の分析—。スポーツ心理学研究, 47(1) : 13-28.
- 川部幸也・村上宏樹・山田憲正 (2021) 剣道の駆け引きから打突で生じる同期現象。中京大学体育研究所紀要, 35 : 37-40.
- 川井良介・菅野慎太郎・山崎紀春 (2023) スポーツチャンバラを教材とした大学体育授業における受講者の共感性および社会的スキルの変化。日本大学FD研究, 10 : 1-13.
- 川井良介・菅野慎太郎 (2024) 大学における一般体育受講者の共感性や社会的スキルの変化—スポーツチャンバラとグループフィットネスエクササイズを教材とした授業の比較—。身体運動文化研究 : 29, 15-31.
- 川井良介・香田郡秀・鍋山隆弘・有田祐二・木村悠生 (2015)

- 剣道競技者の脳内情報処理過程に関する研究：剣道を模したS1-S2選択反応課題時のP300に着目して。武道学研究, 48(2) : 79-88.
- 木原宏子 (2023) 日本の大学における学習支援の現状と課題。桜美林大学研究紀要 総合人間科学研究, 3 : 309-318.
- Kijima, A., Kadota, K., Yokoyama, K., Okumura, M., Suzuki, H., Schmidt, C. R., and Yamamoto, Y. (2012). Switching dynamics in an interpersonal competition brings about “deadlock” synchronization of players. *PLOS ONE* 7(11) : e47911.
- 木野和代・鈴木有美 (2016) 多次元共感性尺度 (MES) 10項目短縮版の検討。宮城学院女子大学研究論文集, 123 : 37-52.
- 桐山雅子 (2008) 学生相談室から見た大学生の発達の特徴。平石賢二編, 思春期・青年期のころ：かかわりの中での発達。北樹出版：東京, pp.140-152.
- 三宅典恵・岡本百合 (2015) 大学生のメンタルヘルス<特集>現代の若者のメンタルヘルス。心身医学, 55(12) : 1360-1366.
- 水本篤・竹内理 (2011) 効果量と検定力分析入門—統計的検定を正しく使うために—。より良い外国語教育のための方法外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部メソドロジー研究会2010年度報告論集, 48 : 47-73.
- 文部科学省 (2022) 学校基本調査—令和4年度結果の概要。https://www.mext.go.jp/content/20221221-mxt_chousa01-000024177_001.pdf, (参照日：2023年8月20日)。
- 元嶋菜美香・坂入洋右 (2019) 中学校剣道授業が生徒の共感性に与える影響—ダンス授業との比較から—。長崎国際大学論叢, 19 : 21-30.
- 難波秀行・佐藤和・園部豊・西田順一・木内敦詞・小林雄志・田原亮二・中田征克・中山正剛・西垣景太・西脇雅人・平工志穂 (2021) 授業者からみたコロナ禍に行われた遠隔による大学体育実技の教育効果の検証。大学体育スポーツ学研究, 18 : 21-34.
- 奈良隆章・木内敦詞 (2021) 大学体育授業における自己開示経験がライフスキル獲得に及ぼす影響。体育学研究, 66 : 515-531.
- 日本大学文理学部 (2023) 学部要覧 令和5年度 (2023年度)。正文社印刷：東京, p.65.
- 西田順一・木内敦詞・中山正剛・難波秀行・園部豊・西脇雅人・平工志穂・小林雄志・西垣景太・中田征克・田原亮二 (2021) 新型コロナウイルス感染症第1波の流行直後における大学体育授業の学修成果：遠隔授業による主観的恩恵と身体活動に焦点をあてた検証。大学体育スポーツ学研究, 18 : 2-20.
- 野口和行・須田芳正・村松憲・村山光義・加藤大仁 (2013) 学生の社会的スキル向上を目指した体育実技実践の試み。慶應義塾大学体育研究所紀要, 52(1) : 11-20.
- 及川恵・坂本真士 (2008) 大学生の精神的不適応に対する予防的アプローチ—授業の場を活用した抑うつ的一次予防プログラムの改訂と効果の検討—。京都大学高等教育研究, 14 : 145-156.
- 澤田瑞也・新田和明・中岡愛・島田真里・杜叡健・白崎彰吾 (1992) 他者の苦境への情動反応に関する研究 (1)。神戸大学教育学部心理学紀要, 2 : 41-51.
- 澤田瑞也 (1995) 人間関係の発達心理学 1 人間関係の生涯発達。培風館：東京, p.55.

- 島孟留・田井健太郎・霜触智紀 (2020) 体育実習が大学生の共感性並びに社会的スキルに及ぼす影響—柔道実習の効果に対する一考察—. 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編, 55 : 61-67.
- 島孟留・中雄勇人・田井健太郎・霜触智紀・木山慶子・新井淑弘・鬼澤陽子 (2021) 大学生の運動・スポーツ活動の頻度や体力・運動能力と共感性の関連. 群馬大学共同教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編, 56 : 109-117.
- Singer, T., Seymour, B., O'Doherty, J., Kaube, H., Dolan, R.J., and Frith, C. D. (2004) Empathy for pain involves the affective but not sensory components of pain. *Science*, 303, 1157-1162.
- 鈴木有美・木野和代 (2008) 多次元共感性尺度 (MES) の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて—. *教育心理学研究*, 56 : 487-497.
- 鈴木有美・木野和代 (2015) 社会的スキルおよび共感反応の指向性からみた大学生のウェルビーイング. *実験社会心理学研究*, 54(2) : 125-133.
- 高柳茂美・杉山佳生・松下智子・福盛英明・眞崎義憲・一宮厚・林直亨・淵田吉男・熊谷秋三 (2017) 大学生のメンタルヘルスの実態とその関連要因に関する疫学研究—九州大学 EQUISITE Study—. *厚生*の指標, 64(2) : 14-22.
- 田邊哲人 (1989) 小太刀護身道. 叢文社 : 東京.
- 田邊哲人 (2002) スポチャンをやろう!. 叢文社 : 東京.
- 内田英二・神林勲 (2006) 週1回8週間のサーキットトレーニングが大学生の体力および感情に与える影響. *体育学研究*, 51 : 11-20.
- 八木沢誠・袴田大蔵・志沢邦夫・長田一臣 (1996) 剣道の熟練度の相違における予測能力とその刺激要因について. *日本体育大学紀要*, 26(1) : 67-77.
- 山本浩二・島本好平・永木耕介 (2013) 中学校柔道授業の検討 : 柔道の技術習得とコミュニケーションに着目して. *武道学研究*, 45(3) : 181-195.
- 山津幸司 (2014) 印刷教材とモバイル型健康支援システムを用いた行動変容及び減量効果の検証 : 女子大学生に対する行動変容プログラム「CPA スマートライフスタイル」による介入. *九州地区国立大学教育系・文系研究論文集*, 2(1) : 1-18.
- 山津幸司 (2023) 大学体育を対象とした運動疫学研究の「これまで」と「これから」を考える. *体力科学*, 72(1) : 41.
- 山崎紀春・大嶽真人・櫛英彦・鈴木理・高橋正則・長澤純一・松本恵・水落文夫・水上博司・伊佐野龍司・吉田明子・加藤夏海 (2022) COVID-19禍における大学体育実技が与える効果 : 2021年度日本大学文理学部の受講生を対象として. *日本大学文理学部人文科学研究研究所研究紀要*, 104 : 199-218.
- 全国大学体育連合 (2010) 体育系学術団体からの提言2010 21世紀の高等教育と体育・スポーツ. <https://daitairen.or.jp/2013/wp-content/uploads/8c9bfeb587647634449d0e0db54f2ebc.pdf>. (参照日 : 2023年8月18日).

(受付 : 2024. 8. 29, 受理 : 2025. 1. 30)

Research Note



Japanese Journal of Physical Education and Sport for Higher Education, 22: 59-69.
©2025 Japanese Association of University Physical Education and Sport

Does a university physical education class using Sports Chanbara as a teaching material improve empathy?:

Case study by comparison with students in ball game and lecture courses

Ryosuke KAWAI¹, Shintaro KANNO², and Kensei ABE³

¹Nihon University, College of Humanities and Sciences,

²Nihon University, College of Sports Sciences,

³Beppu University

Abstract

This study aimed to verify the hypothesis that university physical education classes improved student's empathy by using Sports Chanbara as a teaching material. The subjects of the study were students who took the Health and Sports Education Practicum (Sports Chanbara) course offered at Nihon University, College of Humanities and Sciences, in the first semester of the 2023 academic year (Spochan group), students who took the ball game course in the Health and Sports Education Practicum (Ball game group), and students who took the Health and Sports Education Theory course (Lecture group). Multidimensional Empathy Scale 10-item Short Version (MES-SF) was used as a questionnaire to verify the results obtained by students in each group. The survey was conducted after the 1st and 15th class. There were 38 students in the Spochan group, 111 students in the Ball game group, and 63 students in the Lecture group who had no deficiencies in their responses. Statistical analysis was performed using a two-way analysis of variance with the three class groups as between-subject factors and the two time periods as within-subject factors. As a result, the factors of other-directed responding and perspective-taking on the MES-SF improved significantly after the class as compared to before the class in the Spochan group. These findings suggest that taking Sports Chanbara classes improves empathy, particularly with regard to being able to consider the feelings of others, while thinking from their perspective.

Keywords

Spochan, MES-SF, other-oriented emotional reactivity, perspective taking

Corresponding author: Ryosuke KAWAI Email: kawai.ryosuke@nihon-u.ac.jp